

夫婦のパートナーシップ 現代考

生活研究部 研究員 岡本 裕子

《要 旨》

- (1) 現代の日本の結婚は、晩婚化と男女の年齢差の縮小化、また「恋愛」結婚の増加が特徴となっている。一方離婚をめぐる特徴として、'50年以降、40歳以上の中高年夫婦の離婚率が一貫して増加、また夫も妻も、離婚の申立理由として「性格不和」が最多、さらに申立件数で妻からの申し立てが圧倒的に多い点があげられている。
- (2) 本年1月に実施した「ニッセイビジネスマンアンケート」によると（以下同様）、「お互いにコミュニケーションを大切にしたい」という気持ちは夫婦ともに一致しているが夫が妻よりも仕事第一主義に賛同し、伝統的な性役割観に基づいた意識を持っている点、妻においては、夫よりも日常生活における男女平等意識、自立意識が強い点において夫婦間にズレが生じている。
- (3) 同一夫婦のそれぞれのパーソナリティにおいては、夫に関しては「責任感」「誠実さ」「優しさ」、妻に関しては「明るさ」「優しさ」「子供に対する愛情」が夫婦の絆を深める要素となっている。しかし、夫においては、妻が家庭経済を基盤に現実の生活のふれあいを夫に期待するのに対してどちらかという地味な精神性に自信を持っている姿、妻に関しては、夫が伝統的な女性観に基づいた期待を妻に寄せるのに対して、素朴なシンの強さに一方的に自信を持っている姿が浮き彫りにされ、双方の意識にズレが見えはじめている。また、相手から期待されず、本人も自信を持たない項目をみても、新鮮さを欠いた夫婦関係、コミュニケーション不足の様相を少なからず感じさせる結果となっている。
- (4) 従来価値観に沿って考えれば、現代の夫婦の関係性の変容は〈家庭生活の崩壊のはじまり〉と捉えられがちである。しかし、この過渡期の時代は、たとえ最初は夫婦間で大きな迷いや葛藤を生んだとしても、双方が誠実に対峙することにより、真の信頼関係に基づいた関係へと転換を図っていくことができる絶好のチャンスではないだろうか。夫婦間の意識のズレや、乖離に自覚め、『日常性』の変革を少しずつ行ってみることが、高齢化社会を迎えようとするこの時代に、夫婦が持続して共によりよいパートナーとして生き抜いていくことに繋がるかもしれない。

《はじめに》

社会の基本構成単位である「家族」の機能、その構成員の役割が変容しつつある。この背景としては、高齢化社会の到来、情報化・都市化・核家族化、そして高学歴化、女性の社会進出等があげられる。出生率の低下の最低記録が更新され、男女ともにとれる育児休業法も来年度から施行されることとなった。

また「家族」内部においては、経済の安定成長・成熟化につれ、構成員が多様なライフスタイルを持ち、特に女性、ヤングを中心に個人化、平等化、自立化意識を日常生活に織りこんでいる。ところで「家族」のコア（核）である夫婦の関係はどうなっているのだろうか。本稿は様々な環境変化の中で、過渡期にあると思われる夫婦間の役割、関係性に焦点をあて、より良いパートナーシップの行方を考察するものである。

尚、Ⅱ．現代夫婦の意識特徴は、本年1月に実施した「ニッセイビジネスマンアンケート」（首都圏、京阪神圏、東海圏、札幌圏、福岡圏 1,538組の夫婦を対象）に基づいた。

Ⅰ．現代の婚姻関係の特徴

ここでは夫婦関係を理解する前提として、現代日本の婚姻関係の状況を概観する。

1. 婚姻、離婚の概況

'90年の婚姻件数は、72万2,460組（厚生省人口動態統計の概況）、'89年より1万4,144組増加、婚姻率は人口千対5.9で元年の5.8を0.1上回った。

一方離婚件数は、15万7,640組で、離婚率は人口千対1.28で元年のほぼ同程度で横バイを示した（図-1、2）。

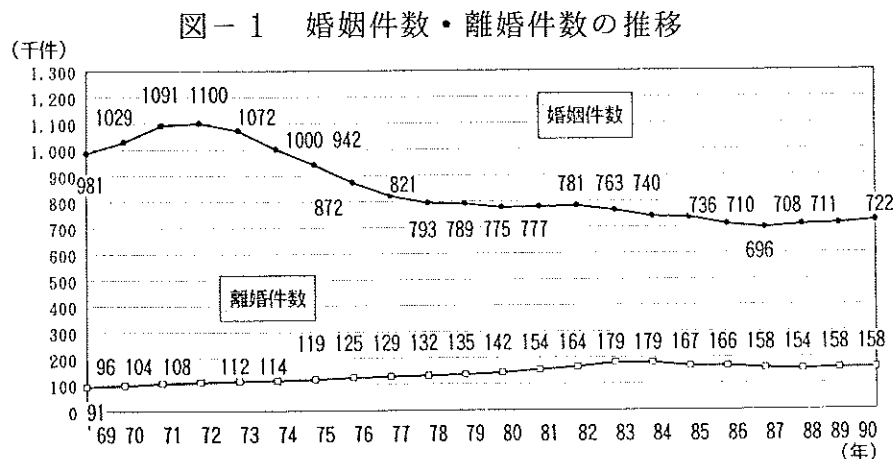
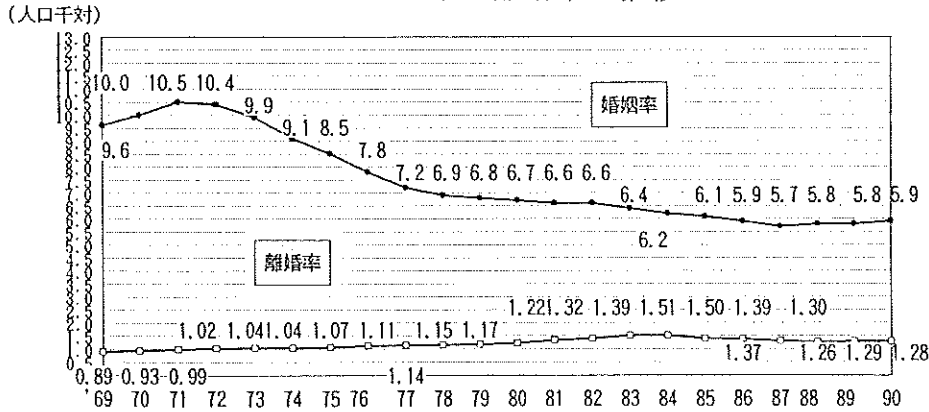


図-2 婚姻率・離婚率の推移



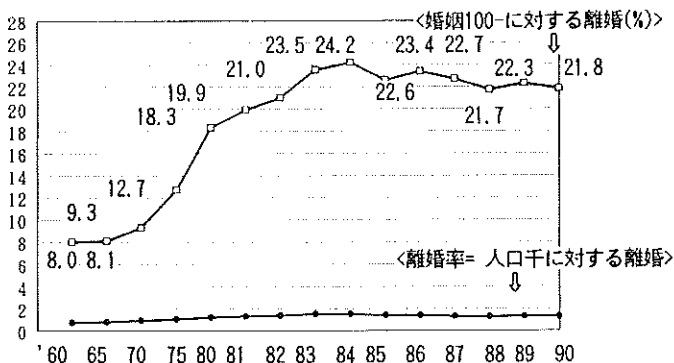
資料：厚生省人口動態統計（'90年は概数）

'70年に初めて100万組の大台に達した婚姻件数は、'72年の110万組（婚姻率10.5）をピークに5年間100万組台を維持した。これは戦後「団塊の世代」が結婚適齢期に達した結果である。その後'73年～'78年までの5年に渡って婚姻件数、婚姻率はともに急減し、'87年に69万6,000組（同5.7）の最低を記録、以降は、漸増傾向にある。しかし、人口高齢化の進行とともに、結婚適齢期人口の相対的減少によって、今後は婚姻率の低下傾向が予測されている。

一方離婚件数は、'75年から急上昇、'84年をピークに以降は減少、横バイ傾向を示しているが、依然年間15万組に達している。

また離婚率も横バイ傾向にあるが、婚姻100に対する離婚率は、'70年から'75年に急増し、'81年以降増減を繰り返しながら依然20%を超したまま'90年は21.8%となっている（図-3）。日本の離婚率は諸外国に比べると低い方であるが（表-1）、統計的には把握できないものの、離婚せずに「家庭内離婚」「潜在離婚」の状態にあ

図-3 離婚率～人口千に対する離婚と婚姻100に対する離婚の推移



資料：厚生省人口動態統計より作成（'90年は概数）

表-1 婚姻率、離婚率の国際比較

国名	年次	婚姻率 (人口千対)	離婚率
日本	1990	5.9	1.28
アメリカ合衆国	1990	9.6	4.70
フランス	1989	5.0	1.91
ドイツ連邦共和国 ¹⁾	1989	6.4	2.96
オランダ	1989	6.1	1.79
スウェーデン	1989	5.2	1.76
イギリス	1989	6.7	2.81
イタリア	1989	5.4	0.44

注) 内は調査年次を示す。1) 旧西ドイツである。

資料：世界人口年鑑 1988

World Health Statistics Annual, 1990
 Monthly Bulletin of Statistics, Dec.1990:UN
 :United Nations, Demographic Yearbook,
 Council of Europe, Recent
 Demographic Developments in the Member
 States of the Council of Europe, 1989
 及び各国中央統計

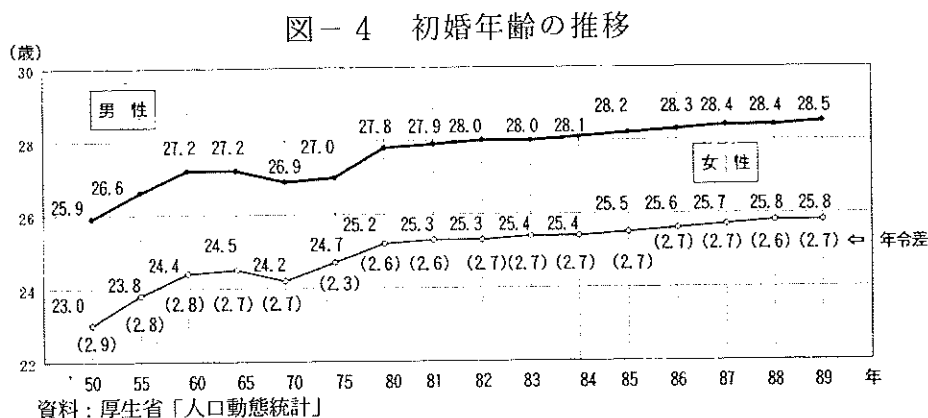
るものも意外に多いといわれ、低い離婚率は必ずしも健全で良好な夫婦関係を表すものではないといわれている。

2. 現代の結婚の特徴

(1) 晩婚化の進展と男女年齢差の縮小化

'89年の日本人の平均初婚年齢は男性28.5歳、女性25.8歳でともに過去最高、また世界的にも最高水準を示すこととなった。初婚年齢は終戦直後のブームに続く、'70年に団塊の世代が適齢期に達した「第二期結婚ブーム」に一時低下するが、徐々に年齢は上昇、この20年近くで男女ともに1.6歳上昇し、晩婚化が進行している（図-4）。

一方夫と妻の年齢差は戦前は夫が約4歳（年上）であったが、現在は2歳台へと縮小し、2.6~2.7歳の間を推移している。背景には配偶者を選択する主な領域が職場・学校等になり恋愛結婚が増加、年齢による同類婚（自分に類似した諸特性をもつ人を配偶者として選択する結婚）の傾向がより高まったことによる。



(2) 恋愛結婚の増加と見合いでも「恋愛に基づく」結婚の増加

夫婦の知り合ったきっかけの形態を「見合い結婚」（見合い及び結婚紹介所による結婚）、それ以外（不詳を除く）を「恋愛結婚」と二分すると、'65年～'69年に結婚した夫婦は「見合い」が40.7%、「恋愛」が57.0%であったものが、恋愛結婚が急増し、'85年以降ではそれぞれ22.6%、75.3%と約1：3の割合となっている。

また「見合い」という形態をとっているが、「自分たちの結婚が恋愛にもとづく結婚である」と回答した夫婦の割合をみると、'65年では「恋愛にもとづく」と回答した人は約3割に過ぎなかったが、最近の'85年以降では7割以上を占めており、「見合い結婚」の形態はその割合の減少だけでなく、出会いから結婚に至るプロセスにおいても変化していることが窺える（表-2）。

表-2 結婚年・結婚形態別夫婦の割合および見合結婚の中でも恋愛に基づく結婚と回答した割合

結婚年	総数	見合い (%)	恋愛	その他
'65年～'69年	1,547	40.7(32.2)	57.0	2.3
'70年～'74年	1,949	31.1(37.9)	66.4	2.4
'75年～'79年	1,899	29.3(44.6)	68.6	2.2
'80年～'84年	1,572	24.4(56.0)	73.2	2.4
'85年～	672	22.6(71.6)	75.3	2.1
総数	8,825	32.0(39.2)	65.7	2.3

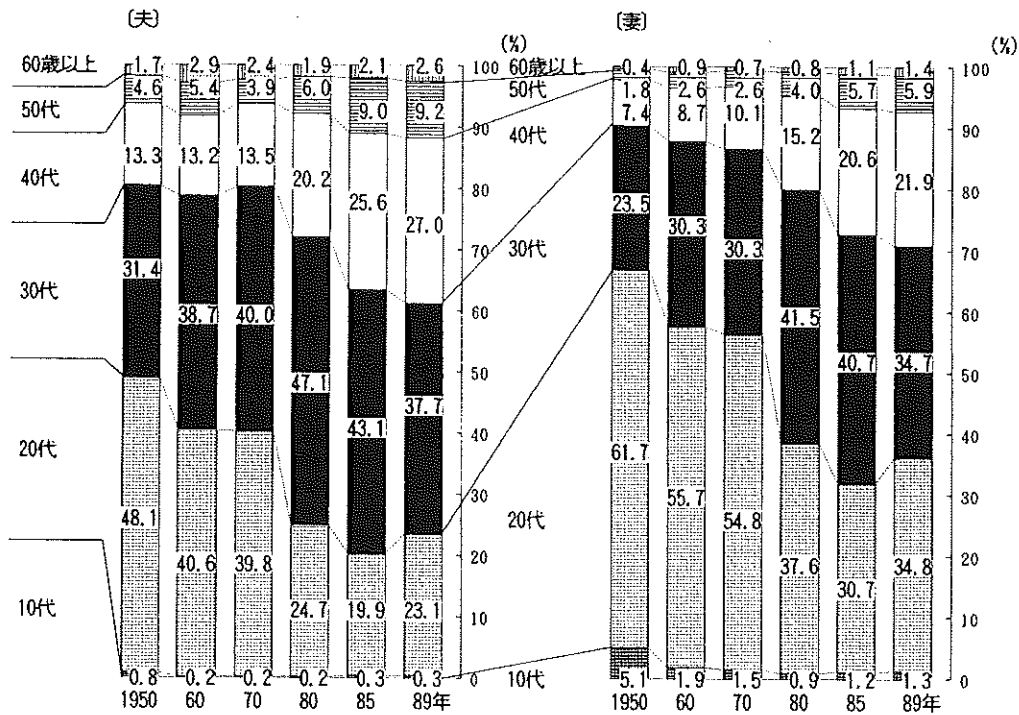
資料：'87年厚生省人口問題研究所「第9次出産力調査」

3. 現代の離婚をめぐる特徴

(1) 一貫して増加する中高年層の離婚

図-5は離婚者の年代別割合の推移である。'89年の離婚者で、夫において、最も割合が高い年代は、30代(37.7%)、次いで40代(27.0%)、20代(23.1%)、一方妻においては20代(34.7%)、及び30代(34.7%)が高く、40代(21.9%)と続いている。近年20代の若年層の離婚は減少していたが'89年から再び増加、また'50年以降、一貫して夫も妻も40歳以上の中高年層の割合の増加が顕著となっている。

図-5 離婚者の年代別割合



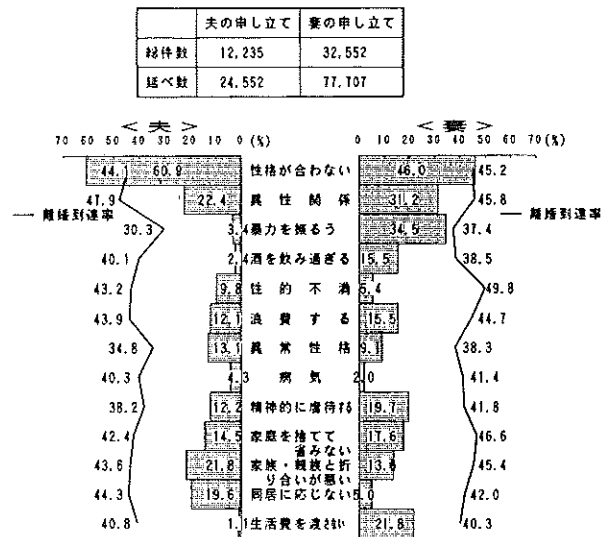
資料：厚生省「人口動態統計」より作成

(2) 離婚調停の申し立て動機では夫婦とも「性格不和」が最多、また圧倒的に多い妻からの申し立て件数

離婚理由として、家庭裁判所に申し立てられた「夫婦関係事件」の申し立て動機をみると、夫も妻もトップは「性格があわない」で夫60.9%、妻46.0%である。夫側は次いで「異性関係」(22.4%)「家族・親族と折り合いが悪い」(21.8%)「同居に応じない」(19.6%)となっている。一方妻において2位は「暴力を振るう」(34.5%)、続いて「異性関係」(31.2%)であり、申し立て件数において圧倒的に妻側の方が多いのが特徴となっている。

離婚は単一の理由や原因によるものではなく、複雑な要因がからみあっている。「異性関係」や「暴力」「家族親族との不仲」も日常の「性格の不和」の積み重ねの結果という見方もでき、日々の意志疎通のあり方が問われるようである。

図一 6 離婚調停の申し立て理由と離婚に到達した比率（複数回答）



資料：H元年、最高裁判所「司法総計年報」3〈家事編〉

II. 現代夫婦の意識特徴

それでは、現実の夫婦間の役割・分業意識、双方を繋ぐ『現在の絆』の特徴はどうなっているのでしょうか。本年1月に実施した「ニッセイ ビジネスマンアンケート」から分析を試みる。

<調査実施要項>

1. 調査対象：企業に勤める既婚ビジネスマンの夫とその妻 1,538組（有効回答）
2. 調査地域：首都圏、京阪神圏、東海圏、札幌圏、福岡圏
3. 調査方法：日本生命の職域専門セールスレディ「リーブ」による留置法、（あるいは郵送法）
4. 調査時期：'91年1月8日～1月21日
5. 回答者：

全体	首都圏	京阪神圏	東海圏	札幌圏	福岡圏
1,538組	522組	273組	415組	143組	185組

1. 夫婦のあり方についての男女の意識

男女や夫婦のあり方についての考えや意見に対して、賛成、反対をそれぞれ男性、女性に尋ね、全体的な傾向で一致度の高い項目、意識のズレ度の高い項目に分けて検討を行った。

(1) 全体傾向

①男女意識に一致度の高い項目

○「夫婦間のコミュニケーションを大切にしたい」と意見が一致する現代夫婦

男性と女性で意見の一致度の高い項目のうち、『賛成』の一致度の高いのは、「夫婦はお互いに意見を言い合いながら一致点を見い出すべき」（賛成率：男性85.4%、女性88.7%）であり、夫婦間のコミュニケーションを大切にしたいと願う共通の意識が表れている。また「男も女も同様に社会参加すべき」（同67.5%、71.4%）と広義の男女平等意識においても同様に『賛成』の一致度は高くなっている。

逆に『反対』の一致度の高いのは「妻がものごとを決め、夫がそれに従うのが平和でよい」（反対率：同80.3%、74.1%）「つりあいのとれた相手を見つけられる見合

い結婚の方が合理的」(同52.4%、49.4%)、さらに全体的に賛成反対の意見が二分されているが男性と女性の一貫性の高いのは、「夫が万一の時に妻が一生働かなくてもよいくらいの生命保険をかけるべき」や「子育てが夫婦間で最も大切」となっており2極化した価値観傾向を示している。

また、個々の夫婦での意見の一貫性を見ると、『夫も妻もともに賛成』の多い意見は「夫婦は意見を言い合いながら一致点を見い出すべき」(該当夫婦の占率76.7%) 「男も女も同様に社会参加すべき」(同53.8%)、そして『夫も妻もともに反対』の多い意見は、「妻がものごとを決め、夫が従うのが平和」(同54.3%)でありいずれも過半数を占めている。

図-7 夫婦のあり方についての男女の意見

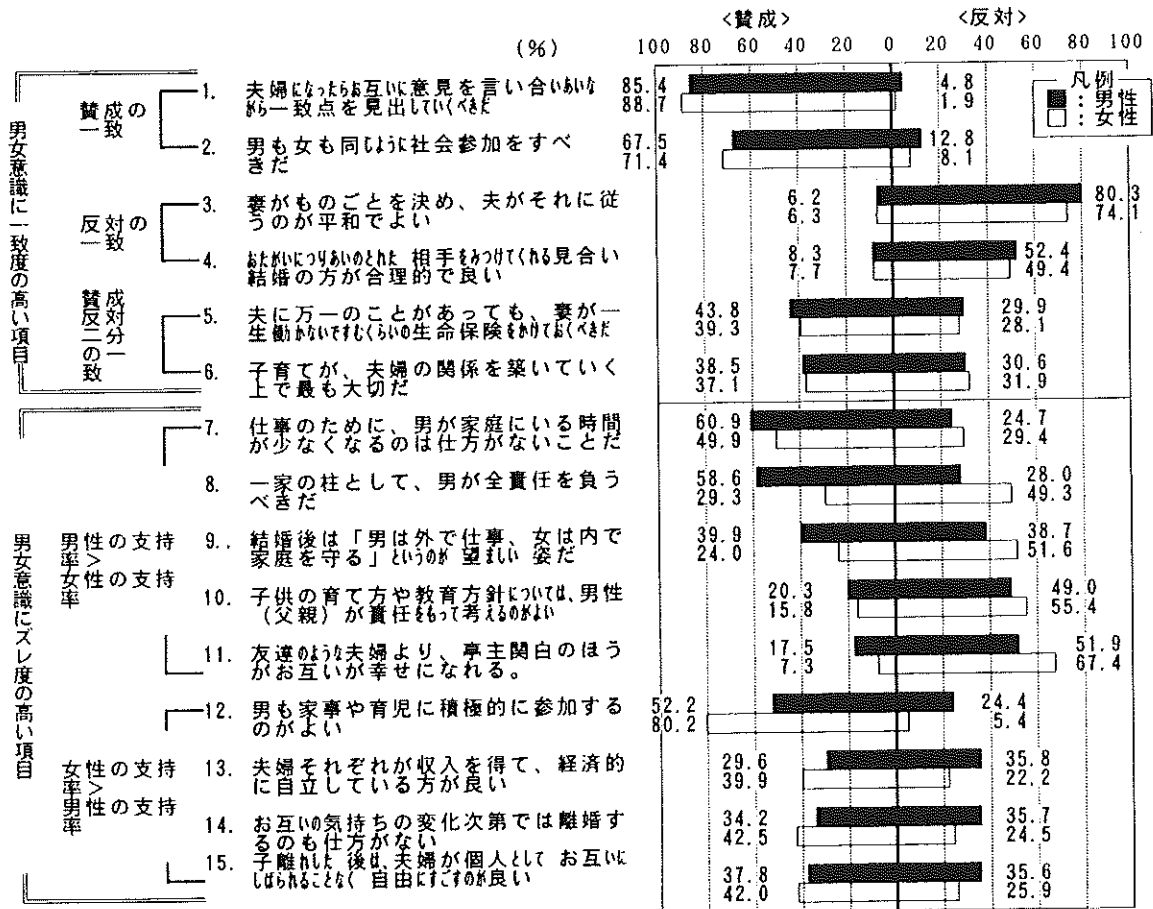


表-3 夫婦のあり方についての男女の意見~同一夫婦の意見

	1. 夫婦は互に意見を言い合いながら一致点を見い出すべき	2. 男も女も同様に社会参加すべきだ	3. 妻がものごとを決め、夫がそれに従うのが平和	4. 見合い結婚の方が合理的でよい	5. 妻が一生働かなくてもよいくらいの生命保険をかけるべきだ	6. 子育てが夫婦の関係を築く上で最も大切	7. 仕事で男が家庭にいる時間が少ないのは仕方がない	8. 一家の柱として、男が全責任を負うべきだ	9. 「男は外で仕事、女は内家庭を守る」というのが望ましい姿だ	10. 子育て・教育方針は男性が責任を担うのがよい	11. 友達夫婦より、亭主関白の方がお互いに幸せだ	12. 男も家事や育児に積極的に参加するのがよい	13. 夫婦それぞれが収入を得て、経済的に自立している方がよい	14. 気持ちの変化次第では離婚するもの仕方がよい	15. 子離れ後は夫婦が個人として自由になるのがよい
夫も妻もともに賛成	76.7	53.8	1.7	2.9	23.0	21.6	24.4	21.2	14.9	5.7	3.7	46.5	18.7	21.7	22.8
夫は賛成 妻は反対	1.2	3.2	3.2	2.6	7.8	7.0	13.5	22.7	14.3	8.1	9.0	1.4	3.8	4.4	5.9
夫は反対 妻は賛成	3.3	5.9	4.0	2.7	6.8	6.1	8.3	4.7	4.7	6.0	2.0	15.5	10.5	10.4	9.7
夫も妻もともに反対	0.3	3.1	54.3	29.1	12.2	15.2	9.6	16.3	23.1	28.0	35.8	2.7	10.9	12.6	12.7

注) 最も占率の高い意見の組み合わせ、不明意見を含む組み合わせは除いてあるので合計100%とはならない

②男女意識にズレ度の高い項目

○夫は「仕事第一主義」、妻は「男も家事や育児に参加を」の意識でズレ

男性と女性で意識にズレのある項目のうち、『男性の方が女性よりも支持率が高い』のは「仕事で男が家庭にいる時間が少なくなるのは仕方がない」(男性60.9%、女性49.9%)「一家の柱として男が全責任を負うべき」(同58.6%、29.3%)「男は外で仕事、女は家庭が望ましい」(同39.9%、24.0%)等であり全体的に、男性の仕事第一主義や伝統的な役割観の強さが読み取れ、価値観が多様化しているといわれる中で、男性側の意識は女性ほど変化していない状況が浮き彫りにされている。

一方、「女性の方が男性よりも支持率が高い」のは「男も家事や育児に積極的に参加するのがよい」(同52.2%、80.2%)、や「夫婦それぞれが収入を得て経済的に自立している方がよい」(同29.6%、39.9%)のような家事や経済面等の日常の男女平等主義に関するもの、また「お互いの気持ちの変化次第では離婚も仕方ない」(同34.2%、42.5%)、「子離れした後は、夫婦が個人として自由に過ごすのが良い」(同37.8%、42.0%)である。高学歴化、女性の社会進出を背景に、男女平等意識、自立意識、個人主義が女性の方で一層進展している状況が窺えよう。

ところで、これらの項目について同一夫婦の意識の組み合わせ傾向をみると『夫も妻もともに賛成』の組み合わせが圧倒的に多いのは、「男も家事や育児に積極的に参加するのがよい」(該当夫婦の占率46.5%)「仕事で男が家庭にいる時間が少なくなるのは仕方がない」(同34.4%)であるが、これらの意見についてはそれぞれ意見が異なる夫婦も1割以上あり、前者は『夫が反対、妻は賛成』が15.5%、後者は『夫は賛成、妻は反対』が13.5%を占めている。

また、『夫も妻もともに反対』が多いのは「友達夫婦より亭主関白の方がお互いに幸せになれる」(同35.8%)、「子育て、教育方針は男性が責任を持つのがよい」(同28.0%)である。

そして、「お互いの気持ちの変化次第では離婚も仕方ない」「子離れ後は夫婦が個人として自由に過ごすのがよい」「夫婦それぞれが経済的に自立している方がよい」等は、それぞれ、『夫も妻もともに賛成』が最も多いが、『夫は反対、妻は賛成』『夫も妻もともに反対』という組み合わせを持つ夫婦も1割程あり意識の多様化を見せている。

(2) 年代別特徴

さて、男女、夫婦のあり方についての考えは、世代差が存在するのではないかと思われるが、特徴はどのように出ているのだろうか。

①全体的に年代とは関係なくほぼ一定の支持傾向を示すものを「年代若⇌年代高」、②年齢が上昇するにつれ、支持率が増加するものを「年代若↗年代高」、また③年齢の上昇につれ、支持率が減少するものを「年代高↘年代若」として項目の分類を行ったものが下記である。

①全体的に年代とは関係なくほぼ一定の支持傾向を示すもの：「年代若⇌年代高」

- ・夫婦になったらお互いに意見を言い合いながら一致点を見いだすべき
- ・男も女も同じように社会参加すべき
- ・妻がものごとを決め、夫がそれに従うのが平和でよい

●コミュニケーションを大切にしたいという願望、広義の男女平等意識においては年代によらずほぼ一定

②年齢が上昇するにつれ、支持率が増加するもの：「年代若↗年代高」

- ・夫が万一のことがあっても妻が一生働かなくてすむくらい生命保険をかけておくべき
- ・見合い結婚の方が合理的
- ・子育てが夫婦の関係で最も大切
- ・仕事のために男が家庭にいる時間が少なくなるのは仕方がない
- ・一家の柱として、男が全責任を負うべき
- ・「男は外で仕事、女は内で家庭を守る」が望ましい
- ・子供の育て方や教育方針については男性（父親）が責任をもって考えるべき
- ・友達のような夫婦より、亭主関白の方がお互いが幸せになれる
- ・子離れ後は夫婦は個人としてお互い自由に

●男性の伝統的性役割意識、仕事第一主義については年齢とともに支持率が上昇、また中高年で高まる「子離れ後は双方自由に」の志向

③年齢の上昇につれ、支持率が減少するもの：「年代高↘年代若」

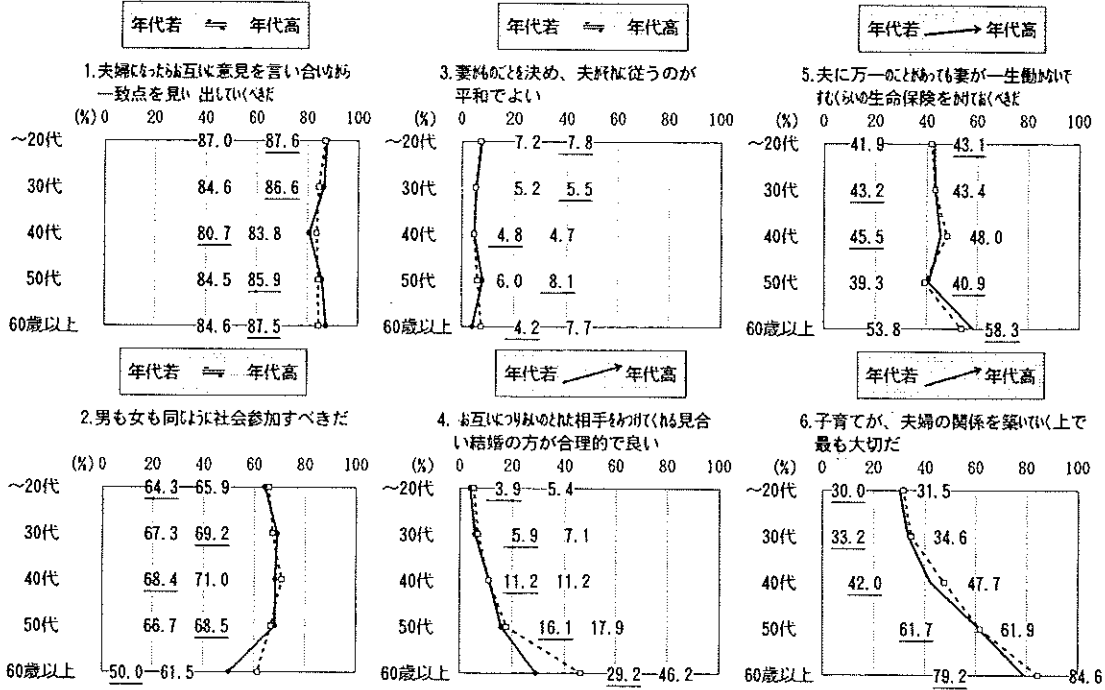
- ・男も家事や育児に積極的に参加するのがよい
- ・お互いの気持ち次第では離婚も仕方がない

●若い層で高まる日常における男女平等派、「気持ちの変化次第では離婚容認」派。

図-8 夫婦のあり方についての男女の意見～支持率

(下線の数値は男性 —男性…女性)

「男女意識に一致度の高い項目」



「男女意識にズレ度の高い項目」

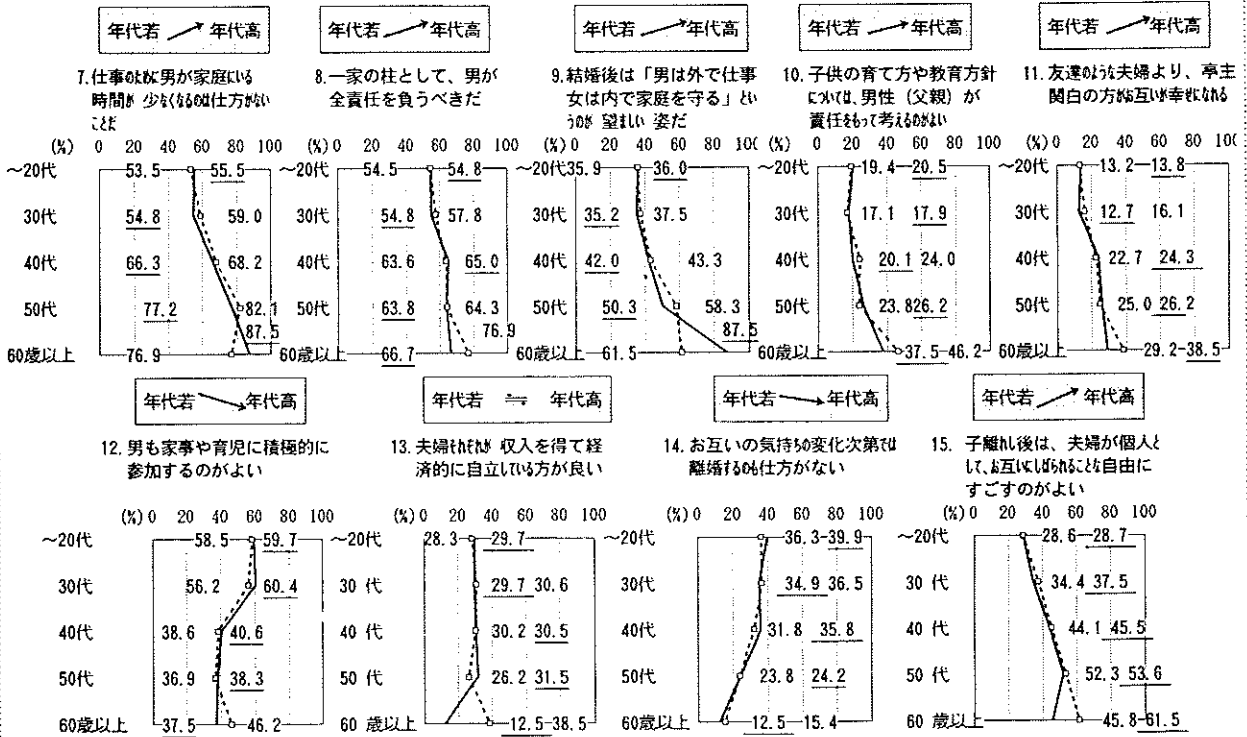


図-8に示すように、全体的に男女意識にズレのある項目も年代別にみると、男女間の差よりもむしろ世代ギャップがあるようだ。男女の性役割観の変化の兆しは若年層から見えはじめている。また、「子離れ後は双方自由に」にみられる中高年で高まる夫婦間の意識の乖離は、相互理解を前提に個人の自由を尊重するためなのか、もはや接点を見いだせなくなっているためなのか、本調査のみからは推測できないが、若い頃からの夫婦相互の関係創りの問題として捉える必要がある。

それでは、夫婦はそれぞれのパーソナリティにおいて、相手に何を期待し自らは何に自信をもっているのだろうか。個々の夫婦における意見の組み合わせに焦点をあててみよう。

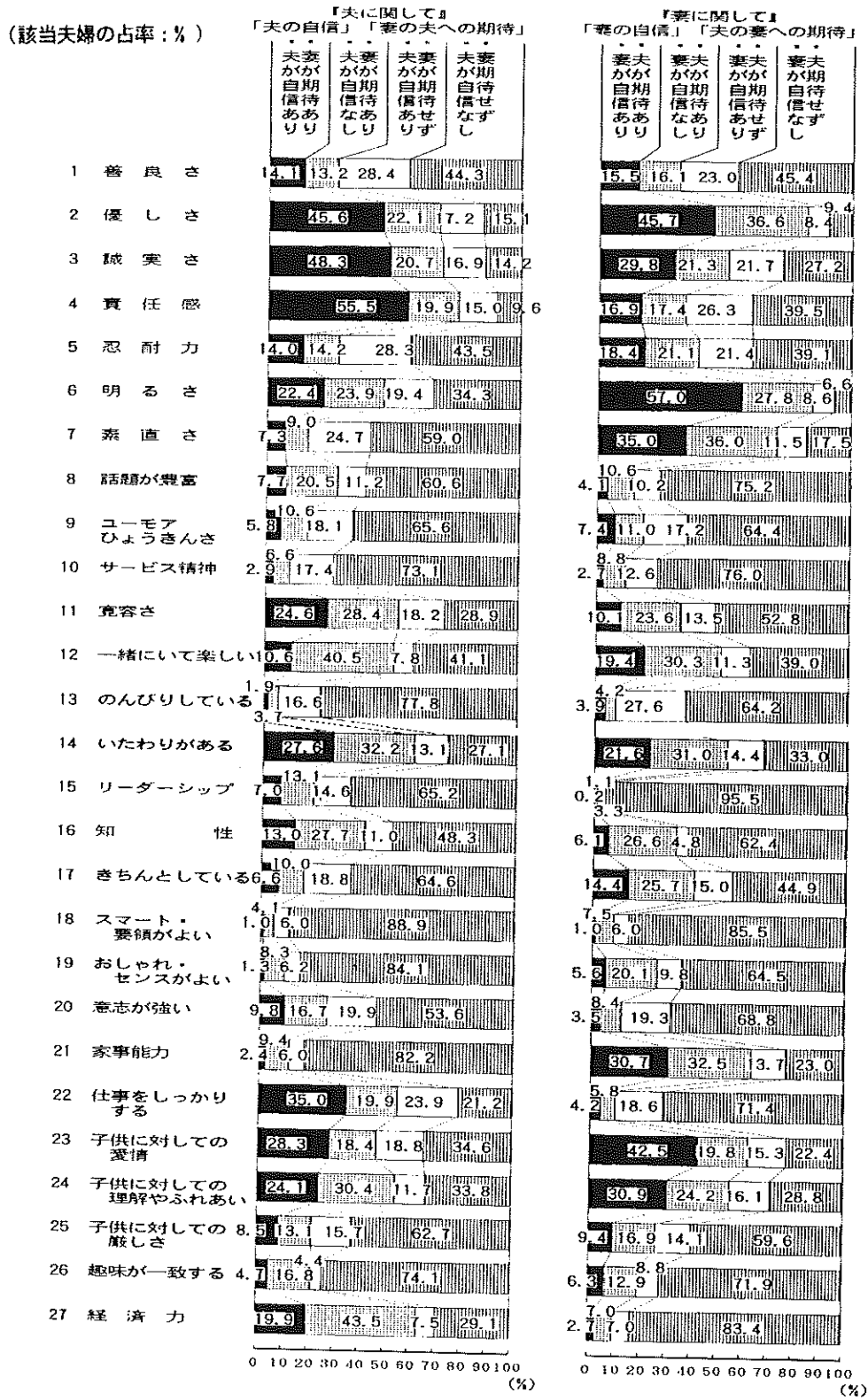
2. 同一夫婦の人生のパートナーとしての相手からの期待と本人の自信

同一夫婦においてそれぞれ、相手からの期待と本人の自信について「『人生のパートナーとしてのご主人（奥様）』にどんなことを期待されますか」「『人生のパートナーである夫（妻）』としてあなたご自身が自信をもって奥様（ご主人）にアピールできることは何ですか」という質問で尋ね、意識の一致度、不一致度を分析した。

それぞれ同一夫婦の意見の組み合わせから4つのタイプに分類、項目のネーミングを行い、占率の高いものから上位5項目を列挙した。

1. 『夫（妻）の◎（にじゅうまる）』項目
～相手から期待され、本人も自信をもっている項目
2. 『夫（妻）は針のムシロ』項目
～相手からは期待されてるが、本人は自信を持っていない項目
3. 『夫（妻）の思い込み』項目
～相手からは期待されていないが、本人は自信を持っている項目
4. 『夫（妻）とエンのない』項目
～相手からは期待されず、本人も自信を持っていない項目

図-9 人生のパートナーとしての相手からの期待と本人の自信



1) 夫婦で考える「夫の姿」

○夫婦収方が納得する夫の「責任感」「誠実さ」。しかし「経済力」「一緒にいて楽しい」等を妻が夫に対して期待するのに対し、「善良さ」「忍耐力」等地味な精神性に一方的な自信を持つ夫

妻の期待に対して、夫が自信を持っている夫婦が多い、つまり夫婦双方の想いの一致度の高い項目を『夫の◎(にじゅうまる)』項目とすると、「責任感」(該当夫婦の占率55.5%)、「誠実さ」(同48.3%)「優しさ」(同45.6%)であり、これら3項目は約5割のペアが該当、夫に関して夫婦で納得する信頼要素とみることができよう。

次に妻の期待があるのに夫の自信のないいわば、『夫は針のムシロ』項目で、夫婦の該当率が高いのは、「経済力」(同43.5%)「一緒にいて楽しい」(同40.5%)そして「いたわりがある」(同32.2%)となっている。

また妻の期待はないが、夫の自信がある、いわば一方的な『夫の思い込み』項目は「善良さ」(同28.4%)、「忍耐力」(同28.3%)「素直さ」(同24.7%)となっており、同一夫婦において、

家庭経済を基盤に現実の生活のふれあいを求める妻に対し、人間性の本質的な要素であるが、どちらかという地味な精神性に自信を持つ夫像が浮き彫りにされている。

そして『針のムシロ』項目に該当する夫婦の方が、『夫の思い込み』項目に該当する夫婦よりも多いことは、家庭内で発言力が高まった妻の姿を映し出しているようである。

さらに妻が期待もせず、夫も自信のないいわば、『夫のエンのない』項目は「スマート・要領がよい」(同88.9%)、「おしゃれ、センスがよい」(同84.1%)「家事能力」(同82.2%)であり、続いて「のんびりしている」(77.8%)「趣味が一致する」(74.1%)と該当率が高くなっている。求めても得られないから期待しないのか、もともと重視していないからお互い期待もせず自信を持たないのかは図りしれないが、恋愛中のペアであれば少なくとも配慮する「スマートさ」や「おしゃれ」、「趣味が一致」等の項目、また女性の社会進出の進展の中で、多少なりとも意識・行動が開発されているべき「家事能力」において双方があきらめの境地であるのは、情報化等様々な環境変化に意外に適応できない、新鮮を欠いた夫婦の様相を呈しているようだ。

図-10 『夫』に対する妻の期待と夫の自信のマッチ度 上位5

該当夫婦の占率 (%)		妻の期待あり	
←「夫は針のムシロ」項目→		←「夫の◎(にじゅうまる)」項目→	
1.経済力	43.5	1.責任感	55.5
2.一緒にいて楽しい	40.5	2.誠実さ	48.3
3.いたわりがある	32.2	3.優しさ	45.6
4.子供に対する理解	30.4	4.仕事をしっかりする	35.0
5.ふれあい	28.4	5.子供に対する愛情	28.3
夫の自信なし		夫の自信あり	
1.スマート、要領がよい	88.9	1.善良さ	28.4
2.おしゃれ、センスがよい	84.1	2.忍耐力	28.3
3.家事能力	82.2	3.素直さ	24.7
4.のんびりしている	77.8	4.仕事をしっかりする	23.9
5.趣味が一致する	74.1	5.意志が強い	19.9
←「夫とエンのない」項目→		←「夫の思い込み」項目→	
		妻の期待なし	

2) 夫婦で考える「妻の姿」

○妻に関しては「明るさ」「優しさ」で双方が納得、しかし妻の「優しさ」に関しては、夫が一方的に期待している夫婦も多い。また夫の「素直さ」「家事能力」の期待に対し、「責任感」「善良さ」等シンの強さを感じさせる要素で一方的な自信を持っている妻

一方妻においては、夫が期待し妻も自信を持っている、いわば『妻の◎(にじゅうまる)』項目は、「明るさ」(該当夫婦の占率57.0%)、「優しさ」(同45.7%)「子供に対する愛情」(同42.5%)であり、これらが妻に関して、夫婦の信頼関係を形成している中心的な要素ということができよう。また夫の期待があるのに妻の自信のないいわば、『妻の針ムシロ』項目で、夫婦の該当率が高いのは、「優しさ」(同36.6%)、これはマッチ項目の上位にもあがっていたが、意識のズレを生じている夫婦の該当率も高い。

続いて、「素直さ」(同36.0%)「家事能力」(32.5%)となっている。

また妻の自信があるが、夫は期待していないいわば一方的な『妻の思い込み』項目は、「責任」(同26.3%)、「善良さ」(同23.0%)「誠実さ」(同21.7%)、続いて「忍耐力」「意志が強い」となっており、妻に対して、夫が伝統的な女性観に基づく期待を寄せるのに対して、妻の側は素朴なシンの強さに一方的な自信を持つ姿が表れている。

そして夫同様、『針のムシロ』項目の方が『思い込み』項目に該当する夫婦よりも多くなっているが、夫ほど両項目の該当率の開きはない。これは、夫の妻に対する関心のなさ、期待の少なさを特徴づける結果といえるかもしれない。

さらに、夫が期待せず、妻の自信のない『妻のエンのない』項目は「リーダーシップ」(95.5%)、そして夫においても上位にあげられていた「スマート、要領がよい」(同85.5%)「経済力」(同83.4%)、続いて「サービス精神」「話題が豊富」があげられている。妻を通してやや新鮮さを失った夫妻のマンネリ化像、コミュニケーション不足の様相が見えるようである。

図-11 『妻』に対する夫の期待と妻の自信のマッチ度 上位5

該当夫婦の占率 (%)		夫の期待あり	
妻の自信なし		妻の自信あり	
＜「妻は針のムシロ」項目＞		＜「妻の◎(にじゅうまる)」項目＞	
1.優しさ	36.6	1.明るさ	57.0
2.素直さ	36.0	2.優しさ	45.7
3.家事能力	32.5	3.子供に対する愛情	42.5
4.いたわりがある	31.0	4.素直さ	35.0
5.一緒にいて楽しい	30.3	5.子供に対する理解やふれあい	30.9
＜「妻とエンのない」項目＞		＜「妻の思い込み」項目＞	
1.リーダーシップ	95.5	1.責任感	26.3
2.スマート、要領がよい	85.5	2.善良さ	23.0
3.経済力	83.4	3.誠実さ	21.7
4.サービス精神	76.4	4.忍耐力	21.4
5.話題が豊富	75.0	5.意思が強い	19.3
夫の期待なし			

Ⅲ. これからの夫婦の行方

○求められる家庭の「情緒機能」、中高年ですれ違う夫婦の想い

H2年9月経済企画庁「家庭観に関するアンケート調査」によると「家庭に対して最も求める機能」として全体の62.5%が「情緒機能」を挙げている。そして「一緒にいてほっとする人」として男性は「妻」を、女性が「夫」を挙げた人がそれぞれ58.2%、49.5%と最も多く、「自分を一番理解してくれる」人では、男性の64.5%が「妻」を女性の57.5%が「夫」を挙げている。しかし「夫」の想いに対して「妻」の想いが少ないのが特徴である（図省略）。

年代別にみると、「一緒にいてほっとする」「自分を一番理解してくれる」、いずれにしても、20代を除いて、「妻」の「夫」に対する想いが「夫」の「妻」に対する想いに比べて少なく、男性が40代以降急激に「妻」に対する情緒的期待が増加し、60歳以上で8割を越すのに対し、女性は5割以下とその差が顕著となっている（図12、13）。

図-12 一緒にいてほっとする人

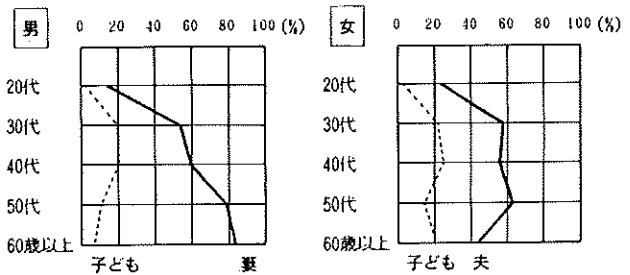
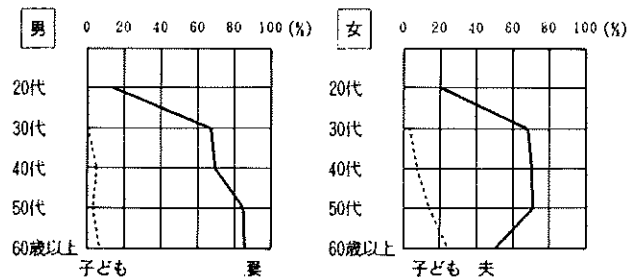


図-13 自分を一番理解してくれていると思う人



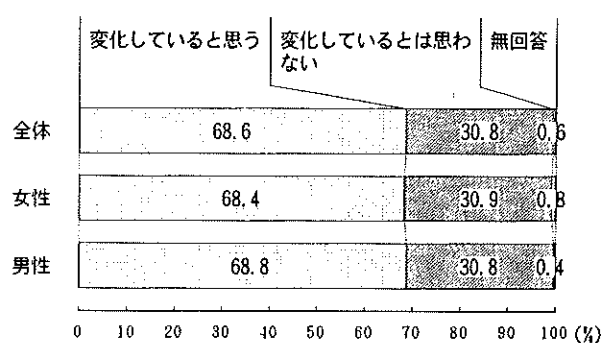
資料：H2年 経済企画庁
「家庭観に関するアンケート調査」

社会的に夫婦の关系的役割としては、所得の提供・享受、身辺サービスの提供・享受、理解・理解の享受、激励・激励の享受、助言・助言の享受、セックスパートナー、余暇活動のパートナー、子供の親、等があげられている。

夫婦双方が一致した価値観で、夫が家庭経済を支え、妻が身辺サービスを提供するという明確な役割分担を持ち、また子供の養育を夫婦の最も大切な絆としていた時代はそれぞれの使命を全うし、さしたる迷いも葛藤も持たずに、『お互いの関係』を安定的に維持することができた。しかし現代の夫婦は、外部環境的にも、意識的にも複雑な変化要因を擁し、『関係』の質も変わってきている。成り行きまかせでは夫婦双方の意識のズレは広がる一方である。「家庭観に関するアンケート調査」においても「家庭の機能が変化している」と考えている人は男女とも6割を超えている（図-14）。

従来の価値観に沿って考えれば現在の夫婦関係は「家庭の崩壊のはじまり」という捉え方がされがちである。しかし、伝統的価値観から新しい価値観へと向かう“今”という過渡期の時代は、最初は大きな迷いや葛藤を生んだとしても夫婦双方が誠実に対峙することにより、真の信頼関係に基づいた夫婦関係へと転換を図っていくことができる絶好のチャンスといえるのではないだろうか。

図-14 家庭機能の変化に対する認識の有無



資料：H2年 経済企画庁
「家庭観に関するアンケート調査」

《おわりに》

聖書物語のサムソンとデリラの物語になぞらえ、「女性が自分の成長と自己実現を快く思うようになればなるほど、経済的優位性を唯一の絆としている男性が、深層で恐怖心を抱き、むやみに独占的になったり、強い防衛手段を持つようになる」ことに象徴される男性と女性の関係を『サムソン＝デリラコンプレックス』という（「サムソン＝デリラ・コンプレックス」エバ・マーゴリス／ルイス ジェネビー共著）。

Iで紹介した女性側における離婚調停への申立件数の多さや、IIの夫婦のあり方における男女平等意識の強さ、また男性側においては伝統的役割観の強さ等にみられる男女意識のズレ、そして、夫婦相互のパーソナリティに関する相手からの期待と本人の自信とのズレをみると、サムソン＝デリラコンプレックスが現代夫婦において、多かれ少なかれ顕在化していることを感じさせる。しかし一方では若い夫婦において、少しずつではあるが「一家の柱として男が全責任を負うべき」や「子育てが夫婦関係の構築で最も大切」という意識から離反しはじめ、夫婦関係の変化の兆しがみえてきている。

サムソンとデリラは悲劇的な結末を辿るが、夫婦は子供の出産・養育、親の介護、相互の意識の変遷等様々な局面の変化に協働して対応し、本来自立した人間同士のつきあいとして、関係を継続して深めていくべきものである。

「妻は家具のような存在」「夫はぬれ落ち葉」「恐怖のワシ族」等夫婦関係の冷やかさを表現するワードが飛び交っているが、夫婦間の意識のズレを認識し、双方がそれぞれの意識の乖離に目覚めて『日常性』の変革を少しずつ行ってみることが高齢化社会を迎えようとするこの時代に、夫婦が持続して共によりよいパートナーとして生き抜いていくことに繋がるかもしれない。